

下巻

貴女のお尻に
ビール瓶
南海部 覚悟

一週間が経ちました。

水面に反射する陽光の揺らぎで、いつもの様に眼を覚まします。

虚ろな視界の正面に、笑子の浅黒い臀部がありました。

沖縄出身の笑子は、健康的な小麦色の肌を持っていました。

深い溝に沿って、敏感なゾーンに指を這わせます。

「冷たくって気持ちいい……。」

「玲子さんのお尻も白くってきれい……。」

腰の下に、吐く息の温もりを感じます。

笑子の太ももの先に、クリスタルブルーのあの円筒が転がっていました、小さなスイッチを入れると、蠕動して近づいてきます。

「これ、気持ち悪い……。」



上半身を起こし、全身の血圧が上がると、現実の意識が脳を満たします。

下着を着ける笑子を横目に、「ねえ、今日またあの路地に行ってみない？」

「気になるんですか？3回目ですよ。」

「30mも入って袋小路でしょ、廻りの建物の窓も、監視カメラも全くないのよ、普通の道路じゃあり得ないじゃない。」

「道路じゃなくて、私有地だからですよ。」

「———私有地？」

「あの店のマスターの土地です、変だなって思ったから法務局で調べたんです。廻りの建物も全てマスターの持ち物です。お金持ちなんです。」

「すごいわ、あなた最近刑事らしくなったわね。」

身支度を整え、玄関で靴を出していると、例によって笑子が唇を奪いに顔を近づけます。

「マスターの経歴、警備部から解答あった？」

「まだです、どうやら福岡の機動隊じゃないみたいですね、警察庁に問い合わせを試みて言いましたが、今度の件で警備部も忙しくて、余り取り合ってくれません。」

早朝の路地も、いつも通り殺風景です。

夜の熱気が、漂う空気に残っているようで、それだけで陰鬱な気分させられます。

「マスターまだ、ヨーロッパから帰って来てないのかしら？」

「2週間だから、まだじゃないんですか？」

袋小路の終端は、2m程の高さのコンクリートの塀になっています。

奥の建物とは1m程度の間隙があり、その間に下に降りる階段がありました。

「地下があるの？この前は気が付かなかったわね、ほら下にドアがある。」

店の裏口と同じようなスチールドアが階段の先にあって、1/4ほど外側に開いています。

腰をかがめ、音をたてないように用心してドアに廻りこみます。

店の裏口のような、軋み音が出ないか慎重に確かめて、部屋の中に侵入します。

真っ暗な地下の部屋に、ノートパソコンの液晶画面が並び、その奥で相当な数の3Dプリンターが、耳障りな金属音を立てていました。

「——30台はあるわね。」

「それ以上ですよ、先輩。何だか気味悪い……。」

押し殺した声が、それでもコンクリートの壁に響きます。

奥で誰かの気配がします、慌てて部屋を飛び出し、階段を駆け上がって、路地のコンクリート塀に身を隠します。

同時に、店の裏口のドアが大きく軋んで閉められました。

「しまった！路地に閉じ込められた！」

玲子が押し殺した声で叫びます、「笑ちゃん、死ぬ気で出口に走るのよ！」

立ち上がった玲子の体が凍りつきます。

中空を凝視して焦点を合わせると、無数の黒い点が、時折小さな赤い光を点滅させながら、じっと空中に静止しています。

「——ごめん笑ちゃん、駄目かもしれない。」

「——分かっています！」

それだけ言うと、笑子がしがみ付いてきました。

女性刑事カップルはそのまま塀の前で、丸くしゃがんで抱き合います。

——その時でした！

男が店のドアを蹴り開けて、悲鳴を上げながら飛び出してきました、体の至る所から白い炎を立ち上げています。

ドアの前で2,3回転倒したかと思うと、顔を覆いながら路地の出口に走り去ります。

カップルを包囲していた黒い点が、それを追いかけて、ゆっくりと去って行きました。

「後で二人とも身体検査ね、ドローンに刺された跡が無いかどうか・・・全裸になって隅々まで診せて貰うわ。」

病室の引き戸を閉めながら、穴見女医が楽しげに声を掛けます。

「あんたより、ドローンの方が全然いい！」

無然とした笑子が、低い声で呟きます。



路地でマイクロドローンに襲われ、九死に一生を得て生還した二人は、念のため大学病院に検査入院していました。

佐藤部長と奥寺が見舞いに来ています。

「店から逃げた男は、やはりマスターでしたの？」

「その通り、火だるまになって近くの交番に駆け込んだ、保護して調べたらヨーロッパにいる筈のマスターだった。」

佐藤部長に続けて、奥寺が答えます。

「穴見先生によると、命に別状はないようです。全部合わせても大した火傷面積にならないようで・・・。」

「マスターは10年前まで、警視庁第四機動隊（鬼の四機）に所属していた。それが、福岡のある事件がもとで退職したらしい。病院に入院中の男性が、暴力団の幹部と間違われて、射殺された事件があった。マスターの恩師だったらしい、私生児のマスターが父親のように慕っていた、その事件に関与していたのが、大濠公園で死んだ若頭だ。警察に幻滅したと同僚に漏らしていたようだ。」

「警察庁のサーバーにアクセスして、中間幹部の顔写真をダウンロードしたのも、マスターのようです。そもそもそのファイルは、マスターたちが全国の機動隊から収集したデータが、基になっているようです。」

「組事務所に送られた供物の配送ルートも、マスターから逆に辿ると経路が簡単に判明した。殆どは、中洲の飲み屋から送られた生花や花輪飾りなんだが、元々の発送はヨーロッパにある複数の生花業者だ、何れもマスターが出資している会社らしい、中洲ではマスターに頼むと、ヨーロッパから綺麗な生花が届くって評判だったようだ。」

「一か月前にも渡航していて、生花や花輪の手配をその時してたんじゃないかと思

ます。アブリン毒素の唐小豆も、これらの生花業者から仕入れたものでしょう。」

「路地の事件の後、店のみんなには再度ヨーロッパに渡航するように言って、そのままあの地下室に隠れていたのね。」

「供物をヨーロッパからあの地下室に送らせ、ドローンを仕掛けて、国内の宅配ルートに乗せたようだ。」

「先輩は、どうしてマスターが怪しいと思ったんですか？」

笑子が振り返って玲子に尋ねます。

「ヤクザがサラリーマンを路地に連れ出した後、ドアにロックしたからよ。そこで何が始まるのか、予め分かってたんじゃない？アブリンのカプセルを装着した自分のドローンを、ドアを閉める前に路地に放したんだと思う。後でサラリーマンの話を読むまでは、自信が無かったけどね。」

「その時、ニコチンを併用しなかったのは、どういう理由だ？」

今度は、佐藤部長が玲子に尋ねます。

「ドローンに穴が二つしかなくて、発火装置とアブリンしか装着できなかったのも理由だと思うけど、ニコチンの即効性で、路地で死人を出したくなかったんじゃないかと思います。結局刺された若頭は、10時間後に大濠公園で死んだわけですから。」

「――でも、どうして私たちは路地で刺されなかったのかしら、完全にスタンバイして、こっちを睨んでましたよ。」

「それはね、奥寺君に細工して貰ったからよ。」

ニヤニヤしながら奥寺が話を受けます。

「中間幹部の顔写真リストに、攻撃してはいけない設定で、黒木さんと白河さんの写真をアップロードしたんです。ついでにマスターの写真をアブリン以外の方法で攻撃する対象にしました。マスターも制御プログラムで、自分の顔を登録していたでしょうから、顔写真リストのコマンドの方が、アドバンテージ（優先度）が高かったようですね。」

「5箇所の組事務所に送付された、マイクロローンの総数は・・・？」

「――約2万機です。」玲子の問いかけに奥寺が答えます。

「約2万機使い果たして手元に無くなったわけでしょ、直ぐに在庫を補充するんじゃないかしら、制御プログラムもダウンロードし直すと思うし、だったらそれに添付されている顔写真リストも新しくなるわ。」

「パスワードでフィルター掛けてある顔写真リストには、誰も入れない筈だからから、書き加えられたことに気が付かなかったんでしょう。」

「でも、前のが一機でも残っていたら・・・。」

「そう、だから一か八かだったのよ。穴見先生に一応解毒のアンブル貰ってはいたけど、保証はできないって・・・。」

「在庫を補充して、また同じことをするつもりだったんでしょうね、地下室の3Dプリンター一斉に動いてたもの・・・。」

「同じことを、更に2・3回繰り返せば、日本中の暴力団は・・・。」

笑子が佐藤を伺います。

「――無くならないね。」遣る瀬無い顔で佐藤部長が呟きます。

「暴力団の社会に対する優位性（アドバンテージ）は何だと思う？」

「犯罪の周辺で起こり得るファクターを想定し、準備し、維持する能力なんだ。それは、犯罪の企画、実行、逃亡、逮捕、裁判、服役、釈放、全ての段階でシステムチックに整備されている。だから、彼ら以上に合理的に非合法行為を遂行できる個人や団体は存在しない。その優位性が、逆に社会に対する彼らの存在意義（レゾンデートル）になっている。」

「お言葉ですが部長、最近話題の“ライフレコーダー”メガネやコンタクトレンズに実装して、人が見る映像を逐次クラウドサーバーにアップロードするシステムですが、この出現によって反社会的組織の犯罪行為が激減しているって聞いています。人が歩き、進入する全ての場所に、監視カメラが付いているようなもので、社会から闇の部分が無くなったって言われていますが・・・。」

笑子がしつこく食下がります。

「プライバシーの問題もあるからな、まだ不完全だ。」

「――でも、どうしてマスターは120人も殺害する必要があったんでしょうか、恩師の仇の、若頭だけで充分じゃないですか？」

カール頭を掻き耨りながら、奥寺がポツリと呟きます。

「其処が今度の事件の核心なのよ、プログラム通販で何処にでもいる飲み屋のマスターが、自衛ツールとは言いながら、800人のプロ集団と対峙できる強力な武器を持ったのよ。大衆の漠然とした正義感が、マスターを突き動かしたんだと思う。機動隊員だったことを別にしてもね。」

「マイクロドローンを、裁判で人を殺害しうる凶器と証明するのが大変だ。まだどの法律も、こんなものを武器と認定してないからな。」

病室の引き戸が開いて、刑事のひとりが顔を出します。

「供物の花輪飾りから採取した指紋が、容疑者のものと合致しました！物証確保しました！」

「よし！逮捕状請求、本部に戻るぞ奥寺！君たちは2・3日有給を取りなさい。」

玲子と笑子に会釈しながら、佐藤と奥寺は病室を後にします。



「最後に一つだけ訊いていいですか、路地の事件の後、どうしてマスターは日本に留まったんでしょう、路地の地下室のような拠点がヨーロッパにあれば、ドローンを出力して、生花に仕掛け、組事務所にヨーロッパから直接発送した方が、アリバイもあって確実なんじゃないでしょうか？」

「多分、ヨーロッパじゃそんな拠点が持てなかったのよ。イギリスやドイツじゃテロの警戒が厳しいし、フランスは非常事態宣言を継続中よ、少しでもそんな噂が広まれば、直ぐに踏み込まれるわ・・・その点日本なら、だれがどこで何をしようとも、無関心の中に埋没できるわ。」

喜色満面に笑顔を湛えて、穴見女医が病室に入ってきました。

「さあ、貴方たち、脱ぎなさい！スッポンポンになるのよ！」

大濠公園のマンションに帰り着いた二人は、靴を脱ぐなりベッドに大の字で横たわります。佐藤部長から有給取得許可のFAXが届いていました。

「何か変なことされませんでした？玲子さん・・・。」

「大きなルーペで皮膚を診られただけよ、眼がちょっと嫌らしかったけどね。」

「そうでしょ、“若いっていいわね”とか言いながら腰を摩るんですよ。気色悪いったらありゃしない！」

「——大丈夫よ、何も感じちゃいないから。でも、もしあの女医さんと変なことになったら、笑ちゃんどうする？」

「勿論、お尻へっぱがして、コーモンこじ開けて——。」

「——ビール瓶ぶっこむの？」

眼下の公園から、季節外れの爽やかな風が、体を重ねたふたりを穏やかに包み込みました。

———終わり。

以上、すべてフィクションです。実在の個人、団体と一切関係ありません。悪しからずご承諾ください。

貴方のお尻にビール瓶（下巻）

<http://p.booklog.jp/book/115137>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/115137>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト